

Gerard の *An Essay on Taste* と Wordsworth

森 豪

Gerard's *An Essay on Taste* and Wordsworth

Tsuyoshi MORI

This paper deals with the comparison between Gerard's thought on Sublimity and Beauty in his *An Essay on Taste*, and Wordsworth's thought on those. Gerard discusses the joys of Sublimity and Beauty. He says we are pleased to find our faculties excellent when we face sublime or beautiful objects. In Wordsworth's case, our faculties sleep when we face those objects and feel pleasure. There is a difference between their thoughts about "ego." Wordsworth considers that the "ego" is dual. His pleasure arises from the deep and divine "ego." Then Gerard distinguishes Sublimity and Beauty, but thinks that they exert reciprocal influences on each other. Those qualities exist in the same object in Wordsworth, too. But Wordsworth says that they do not affect our minds at the same time. Taking Wordsworth's words into consideration, we had better think that Wordsworth's two qualities in the same object are similar to Gerard's "principal" and "subordinate" qualities. Wordsworth's those qualities are shown as the foreground and the background in "It is a beauteous evening." And Gerard's imagination is similar to Wordsworth's. But Gerard does not think of imagination and fancy from the religious point of view. The main difference between Wordsworth and Gerard is in the difference between their religious minds.

I

本稿の目的は、*An Essay on Taste*¹⁾に於ける Gerard の中心的な思想と Wordsworth の崇高や美に関する思想を比較し、Wordsworth の独自性を考察することである。

Gerard の *An Essay on Taste* は、1759年に出版された。彼によれば、「審美能力」("taste")は「"nature"の賜物」でもなく、「"art"の結果」でもない。その起源は、「精神("mind")に本来備わった能力("powers")」にある。しかしこの「能力」は、文化の助けがなければ十分発揮されない。結局、「審美能力」とは、「nature」と「art」の両方の働きによって成立するものである²⁾。

彼は全体を三部に分けている。第一部は、「審美能力を構成する単純原理」("Taste resolved into its simple principles")について、第二部は、「単純原理の結合による審美能力の形成」("The formation of taste by the union and improvement of its simple principles")について、第三部は、「審美能力の領域と重要性」("The province and importance of taste")について述べられている。以下、各部の中から Wordsworth との関連から見て重要だと思われる思想について、Wordsworth の思

想と比較しながら述べてゆきたい。

第一部で、「審美能力」の起源である「精神に本来備わった能力」は「想像力の能力」("powers of imagination")であり、Hutcheson のいう「内的感覚」("internal or reflex Senses")であるとされている。そしてそれは「単純原理」("simple principles")とも呼ばれている。「単純原理」には六種類ある。六「単純原理」とは、「新奇感」("a sense of novelty")、「崇高感」("a sense of sublimity")、「美感」("a sense of beauty")、「模倣感」("a sense of imitation")、「調和感」("a sense of harmony")、「滑稽感」("a sense of oddity and ridicule")、「倫理感」("a sense of virtue")である³⁾。この中で興味をひくのが、「崇高感」と「美感」である。

彼の「崇高感」⁴⁾は、対象のもつ「膨大性」("quantity or amplitude")という性質と「単純性」("simplicity")という性質の結合によって形成される。我々の精神は、事物の性質に応じて働き、膨大な対象が現前に呈示されれば、我々の精神はその対象に応じて拡大し、精神全体が「ある崇高感」("one grand sensation")に満たされ、その感情は「崇高な静謐感」("a solemn sedateness")になり、「深い驚異と讚嘆」("deep silent wonder and

admiration”)に至る。我々の精神は、生き生きとして活気づくにつれ、膨大な対象に応じて膨張する困難を感じるが、その困難を克服すると、精神にはその膨大な光景のあらゆるところに自分自身が存在するように思われてくる。この膨張感から、「自尊心」(“a noble pride”)を感じ、精神自身の能力についての「気高い思い」(“a lofty conception”)をもつようになる。

この説明の中で注目したいのは、「崇高感」を構成するのは対象のもつ性質ばかりでなく、主体自身の自分の精神能力についての「自尊心」であるという点である。彼は、「精神は外界の対象の刺激ばかりでなく、精神自身の働きの自覚から、喜びや苦痛を得る⁵⁾」と言っており、主観主義的側面を強く示している。Owen と Smyser は、この対象とともに精神が拡大、膨張していくという部分を Wordsworth の崇高論の一部の説明の注としてあげている⁶⁾。注の付された Wordsworth の崇高論の一部とは、

Power awakens the sublime either when it rouses us to a sympathetic energy & calls upon the mind to grasp at something towards which it can make approaches but which it is incapable of attaining —yet so that it participates force which is acting upon it ; ⁷⁾

である。この中でも特に「精神が近づけるけれども到達しえないものをとらえようとする」ことの Gerard との類似性の指摘であると思われる。対象の「威力」(“power”)が精神に働きかけると精神はその対象に向かい、その「威力」に「参加」(“participation”)しようとする。その時に崇高が生じると Wordsworth は言う。この「参加」と対照的なのが「屈従」(“prostration”)である。対象に威圧され、その「威力」に平伏した状態である。その時にも崇高は生じるが、あまりに威圧感が強く、不安が限度をこえると身の安全から対象でなく自分だけのことを考えるようになり、崇高は消えてしまう。また、「参加」とは自発的な行為であり、自発性が強くなりすぎると「対抗」(“resistance”)の状態となる。「対抗」の場合で崇高が生じるのは、「威力」を消すことができると自覚している時や、「統一」(“unity”)に達することができるという自覚が精神にある場合である。この「対抗」による「統一」から生じる崇高は最も Wordsworthらしい特色であるが、ここでは Wordsworth の「参加」と「自尊心」の関係を考えてみたい。

Wordsworth の有名な詩句に、「賢明なる受身の態度」(“a wise passiveness”) (“Expostulation and Reply,” l.24)がある⁸⁾。しかし精神の自発的作用も Wordsworth

には重要な要素である。*The Prelude* (1805)⁹⁾の第二巻に、精神が成長してくるにつれ、自分の精神から「或る補助的な光」(“An auxiliar light”) (l.387)が生じ、目没や鳥、そよ風、泉に「新たな輝き」(“new splendor”) (l.389)を与え、「服従」(“obeisance”),「献身」(“devotion”) (l.394)そして「恍惚」(“transport”) (l.395)が生じたと述べ、十七歳の頃次のような体験をしたと述べている。

From Nature and her overflowing soul
I had receiv'd so much that all my thoughts
Were steep'd in feeling ; I was only then
Contented when with bliss ineffable
I felt the sentiment of Being spread
O'er all that moves, and all that seemeth still,
O'er all, that, lost beyond the reach of thought
And human knowledge, to the human eye
Invisible, yet liveth to the heart,
O'er all that leaps, and runs, and shouts, and
sings,

.....
..... for in all things
I saw one life, and felt that it was joy.
One song they sang, and it was audible,
Most audible then when the fleshly ear,
O'ercome by grosser prelude of that strain,
Forgot its functions, and slept undisturb'd.
(*The Prelude*, II, 416-434)

「自然」(“Nature”)から非常に多くのものを受容し、自分の「思想」(“thoughts”)と「感情」(“feeling”)が一つになった時、「実在感」(“the sentiment of Being”)がすべてのものに広がってゆき、詩人はすべてのものに「一つの生命」(“one life”)を見、すべてのものが「一つの歌」(“one song”)を歌うのを聞いたという。精神の膨張ということでは、Gerard と類似しているといっよいであろう。「実在感」が広がってゆく体験は、精神の「補助的な光」の発生体験を経て、「非有機体に私自身の喜びを移入した」(“To unorganic natures I transferr'd/My own enjoyments”)(II, 410-411)体験の結果であり、精神の自発的膨張の働きによるものである。問題は「自尊心」である。Gerard は、精神の膨張によって自分自身が光景のいたるところにいると感じ、自分の能力に「自尊心」を感じると言う。Wordsworth の場合、いたるところにあるのは「一つの生命」であり、その自覚によって「喜び」(“joy”)を得ている。広がってゆく「実在

感」は確かに精神作用ではあるが、Gerard のいう精神とは異なったものである。「一つの歌」を聞く時、Wordsworth の「肉体の耳」(“the fleshly ear”) は眠ってしまう。これは Gerard が「自尊心」を感じる「自分の能力」が眠ってしまうことを意味している。Wordsworth の感じる「喜び」は、Gerard の「自尊心」とは違ったものである。

「実在感」を得た体験と同じものが、“Tintern Abbey”にも描かれている。都会での夢想到に於て、肉体が眠り、「生ける魂」(“a living soul”) (1.46) になった時、「深い喜びの力」(“the deep power of joy”) (1.48) によって「静められた目」(“an eye made quiet”) (1.47) で、「事物の生命」(“the life of things”) (1.49) を見通している。また、「気高い思いからくる喜びで私をゆさぶる或る存在」(“A presence that disturbs me with the joy/Of elevated thoughts”) (11.94-95) を感じ、すべてのものに住まう「或るものについての崇高感」(“a sense sublime/Of something”) (11.95-96) を感じるようになったことを述べている。これらの「事物の生命」、「或る存在」、そして「或るもの」は、“The Simplon Pass”に於て「一つの精神」(“one mind”) (1.16) と呼ばれ、すべてのものがこの「一つの精神」の働きであると考えられるようになる。そして *The Prelude* 第六巻に於てこの“The Simplon Pass”の詩句が挿入される時、この詩に描かれた体験が想像力による体験であることを示すために想像力の訪れに関する詩句を書きそえている。想像力の訪れの時にこそ、「偉大なものが住まい」(“Greatness make abode”) (1.536)、「我々の本質」(“our nature”) (1.538) に「無限なるもの」(“infinitude”) (1.539) を意識すると述べている。更にこの想像力作用は、「魂の強力で神聖な能力についての崇高な自意識」(“a sublime consciousness of the soul in her own mighty and almost divine powers”) ¹⁰から生じるものと考えられるようになる。

このように Wordsworth の考え方の変化を拾いあげてみると、結論として「崇高な自意識」によってすべてのものが崇高なものに変質するということになる。これを Gerard の精神の膨張論と比較してみる時、Wordsworth は崇高な光景のいたるところに自分自身がいるどころか光景を崇高なものに自分自身に変質すると考えていることが分る。Gerard よりも主観主義的であり、自己中心的である。しかし「崇高な自意識」にある「自尊心」は、Gerard の「自尊心」とは異なる。Wordsworth の「崇高な自意識」は、「魂」(“the soul”) の能力についての「自意識」であり、表層の分析的な自我作用を否定する「賢明なる受身の態度」の延長上に於て発見されるものであ

る。Gerard には Wordsworth のような深い自我についての認識はなく、その自我は表層の自我であり、その「自尊心」も自我を否定したところに見出される深層の自我からくる「自尊心」ではない。

次に Gerard は、膨大な対象によって喚起されるものと同じ感情を喚起するものはなんでも崇高になると述べている。崇高に第一に求められる「膨大性」を欠いていても崇高と呼ばれるものがある。しかしそれらをよく調べてみると、それらのものは膨大な対象がもたらすものと同じ働きをもつ性質を備えている。たとえば「連続性」(“length of duration”) である。無数の結合したものが「膨大性」を分かちもち、精神を高揚させる。一群の連なる兵士達は、共通の目的に向かう姿やその多数によって「崇高感」を感じさせる。

そして「膨大性」に変わりうるものは、そのような視覚的、空間的なものばかりではない。「勇猛心」(“heroism”) という passion の一種でも、危険に対抗し、無数の国を支配し、広大な国を治める強力な支配者を思えば、崇高なものになりうるし、自然の風景を前にしてその風景の原因にさかのぼって考え、その風景の創造者の偉大さに思い至った時、その風景は崇高になると Gerard は言っている。

この説明の中で、「連続性」と、「勇猛心」及び「自然の原因」に関する説明には違いがある。「連続性」に関する説明は、彼が結果に於て膨大な対象がもたらすものと同じものをもたらすものとして、「嵐の海」や「雷鳴」をあげ、恐怖を喚起するものは崇高になると述べている点にも見られるように、Burke の系列に入ることはである。対象のもつ性質とそれが主観に与える心理的、生理的効果に視点をあてた見方である。それに対し、「勇猛心」と「自然の原因」に関する説明は、対象に対する主観の精神作用に重点を置いた見方から出たことばである。これらは「連想作用」(“association”) について述べたものである。この「連想作用」は第一部の重要な論点でもある。

彼によれば、崇高の性質をもたない対象でも、連想によって崇高になれる。連想によって、全体や他の性質と関係づけられる。連想によって、一つの観念から別の観念へ素早く移動し、それらの観念は同時に影響を与えることができる。どのような対象であっても、崇高なもの別の観念を精神へ素早く入れれば、その別の観念との関係でその対象は崇高になる。

このような「連想作用」が最も生かされるのが文学であると Gerard は主張する。文学は観念の喚起によって成立する。「原物」(“the original”) が崇高であれば、その「模倣物」(“the imitation”) も崇高になり、「原物」

が喚起するものと同じ感情を喚起できる。しかしその「原物」が崇高を欠いていても、文学の場合、比較や連想によって崇高になれる。崇高をもたないものに崇高を与える力、他との関係によって与える力は文学独自である。他の芸術は崇高な性質をもつ対象の模倣、複写しかできない。

これらの説明にある Gerard の意図を満たしたのが、Wordsworth の“Resolution and Independence”である。蛭取りの老人は、元来、常識的に見て崇高の対象ではない。崇高な性質をもたないものである。その蛭取りの老人を Wordsworth は崇高な対象とした。Wordsworth は特に比喩を使うことによって老人を崇高な対象にした。

“Resolution and Independence”に於て、蛭取りの老人に出会うまでには、詩人をとり囲む自然の風景と詩人の状況が描かれている。自然は明るく生き生きとしている。しかし詩人には暗い思い(突きつめていけば、死の恐怖)が訪れている。詩人が思い悩んでいる時、蛭取りの老人に出会う。詩人は老人を「巨大な石」(“a huge stone”) (1.57)と「海獣」(“a sea-beast”) (1.62)にたとえている。この比喩は老人に形態的重量感、「膨大性」を与える。そしてこの老人はあまりに年老いて、「生きていても死んでいるとも眠っているともつかない」(“not all alive nor dead, / Nor all asleep”) (ll.64-65) 状態である。この描写は、老人がもはや通常の時間の支配を受けない存在であることを思わせる。そして老人の体は二重に曲がり、その足と頭は「生涯の遍歴」(“life's pilgrimage”) (1.67)の末に一つになろうとしていた。その状態は、「あたかも苦痛の恐ろしい重圧が... 人間に耐ええない重みを彼の体に加えたかのよう」(“As if some dire constraint of pain... / A more than human weight upon his frame had cast.”) (ll.68-70) であった。この「生涯の遍歴」や「人間に耐え得ない重み」は、宗教的な巡礼者、遍歴者、受難者を連想させる。そして再び自然の比喩を用い、「老人は風が吹き荒れてもその風音に耳をかさず、いざ動けば一団となって動く雲のように、じっと立っていた」(“Motionless as a cloud the old Man stood, / That heareth not the loud winds when they call ; / And moveth all together, if it move at all” (ll.75-77) と詩人は言う。これによって我々の想念は空間的に広がり、老人の中に悠久さを見出し、老人の静的な姿の中に底知れぬエネルギーがあることを知る。

老人は泥水を、「あたかも書物を読むかのように」(“As if he had been reading in a book”) (1.81) 見つめ、蛭を探す。老人は、「礼儀正しいことば使いで」(“In courteous speech”) (1.86) 話し、その話は「堂々とした

話”(“a stately speech”) (1.96)で、「神と人に誠実を尽くす信仰の人」(“Religious men, who give to God and man their dues”) (1.98) の用いるような言葉であった。彼は様々な困難を忍び、「神の恵みで」(“with God's good help”) (1.104), 「正直一途に暮らしてきた」(“he gained an honest maintenance”) (1.105) 人であった。これらの描写により、老人が倫理性豊かな人物であることが分る。

以上のような老人についての説明は、結局、作者自身の老人についての簡潔なことば、老人は「不屈の精神、独立心、忍耐心、そして倫理的威厳」(“the fortitude, independence, persevering spirit, and the general moral dignity”)¹¹⁾の人であることに尽きる。それらの精神的特質が「膨大性」や悠久性、更には無限性を伴う自然物の比喩とともに描かれ、詩人が暗い思いを耐えぬく支えとして老人を考えるようになることが納得できるようになり、老人に「崇高感」を感じるのである。

ここで触れておきたいのは、自我ということである。詩人は暗い思いに苦しめられる自我の危機的状態からの離脱のために老人を創造した。老人は詩人の反映とも言える。そこには詩人の自我も反映している。詩人は自我の危機の中からどのような自我を確立したか。それは老人の自我を見れば分かる。老人は、いわゆる無我の人である。我々のいう、分析的な、表層の自我という面からいけば、無我の人である。しかしこの老人ほど強く自我の存在を感じさせる人物はない。その自我とはどういふものか。あえていえば、自然そのものである。老人は様々な自然にたとえられるが、老人は自然そのものだといつてよいのである。

II

Gerard の「崇高感」についての主な論点は、対象のもつ「膨大性」という特質の指摘、膨大な対象に面した時の主体の「自尊心」の指摘、そして主体の能動的な「連想作用」の指摘であった。「美感」(“the sense of beauty”) についての説明の主なものも、美しい対象のもつ特質の指摘と「自尊心」の指摘そして「連想作用」である¹²⁾。

Gerard は、美の対象には「一様性」(“uniformity”), 「多様性」(“variety”), 「均衡性」(“proportion”) の要素があると言う。あらゆる美しい対象は、「一様性」という性質をもっているが、その根底には「平易性」(“facility”) という性質がある。この性質は、崇高な対象を与える「困難性」とは対照的なものである。この「平易性」は「曖昧性」に対立し、思考や言語を明確にする。この性質をもつ「一様性」は、容易に精神に入り、我々の関心をそらさず、性急に目移りさせることもなく、各々の

部分についての明確な思考に導き、部分に全体を暗示させたり、他の部分を想起させ、精神を喜びとともに働かせる。しかし「一様性」は精神を怠惰な状態に陥させ、「退屈な形式性」(“dull formality”)になってしまふ。それを防ぐために「多様性」(変化)が必要である。だが、「多様性」ばかりでは疲れる。そこで「一様性」と「多様性」の結合が必要となり、これら二つの性質は互いの効果を緩和することによって、各々が与える喜びを高める。

これらの「一様性」と「多様性」の他に美の対象にとって必要なものは、「均衡性」である。「均衡性」の欠如は、対象についての一つの完全な、明確な概念を形成させず、我々が自分の能力に不快な意識をもち、不快になる。我々が最も喜びを感じるのは、我々自身の能力についての「気高い思い」をもつ時であり、そのような思いを与えるものに喜びを感じ、我々の能力の不完全さを思い起させるものほど不快なものはない。この点に於ける Gerard の説明は、崇高に関する、膨大な対象の与える「困難性」の克服とともに感じる精神自身の「自尊心」の説明と類似している。そしてこのような対象の卓越性からくる喜びに、主観の精神自体の卓越性の自覚からくる喜びが融合しているという観点は、次のような「一様性」、「多様性」、そして「均衡性」の与える喜びについての説明の中にも見られる。

「一様性」、「多様性」、そして「均衡性」が喜びを与える理由として彼は、これらのものが「意図」(“design”, “wisdom”, “contrivance”)の現れであることをあげている。一つの芸術作品に「一様性」を見出す時、我々はそれが偶然の結果ではなく、「意図」があって形成されたと思う。「多様性」を見出す時、我々はそれが「意図」のない、機械的原因から生まれ出たものとは思わない。「一様性」と「多様性」が同一事物に見出された時、それが精神から生まれたことは明らかであり、そのような対立的性質を結合するには、「意図」と「技術」(“art”)が働いていたのだと思ひ、満足感に浸る。原因の素晴らしさに喜びを感じ、原因の素晴らしさを暗示する結果を見て喜びが高まる。「均衡性」は、原因にある高度な「意図」を示す。その「意図」は精神の性質であり、精神の卓越性の自覚から喜びが生まれる。この喜びは、「驚嘆」(“admiration”)の一種で「崇高の感情」(“the sentiment of sublimity”)に似ている。しかし「穏やかで優しい感情」(“a soft and tender sensation”)をうみだす美の対象からひきおこされているので、「優しい感情」に修飾され、優しい性質をもつようになっている。美の認識に特有の「優しさ」(“tenderness”)と「穏やかさ」(“softness”)をもっている。

この美の認識に伴う精神の卓越性の自覚の指摘は興味深い。崇高の場合の「自尊心」との違いを認めている点も興味深い。美の対象による精神の卓越性の自覚は、「連想作用」によってもたらされている。そのことは、「有効性」(“utility”)や「適合性」(“fitness”)についての次のような説明の中にも示されている。

「有効性」や「適合性」とは、目的と関わりのある性質である。ある芸術作品の中に目的との「適合性」を認める時、原因にある「意図」に気づく。その「意図」は精神の卓越性を示し、その自覚によって喜びを得る。一つの作品に対して時、「連想作用」によってその目的を考え、比較し、この目的と関連づけて部分の「適合性」を調べる。部分が目的に適合していなければ、我々は不快になる。それは我々の欠陥を暗示するからである。部分の「適合性」を見出す時の喜びは、我々がそれを所有しているという自覚に伴う喜びである。

これらの Gerard の説明の中で、Wordsworth の思想と比較してみたい点は、美の対象のもつ「一様性」と「多様性」という性質の指摘と美の対象に対して生じる「自尊心」に似た感情の指摘である。「一様性」と「多様性」に対して Wordsworth は否定的である。それは London の描写を見れば分る。詩人は *The Prelude* 第七巻で、London を「空疎な混乱」(“blank confusion”) (1.695) と嘆き、大都市では人々は「法則も、意味も、目的もない多様なものによって、一様なものに分割、還元されている」(“melted and reduced/To one identity, by difference/That have no law, no meaning, and no end”) (11.702-704) と言っている。Wordsworth は第一に個性の確立を求め、明確な個体としての存在を求める。そのような個別的に対象を見る視点は、“She dwelt among the untrodden ways”に於ける「苔むす岩のそばで人の目から半ばかくれた堇、ただ一つ空に輝く時の星のように美しく」(“A violet by a mossy stone/Half hidden from the eye!—Fair as a star, when only one/Is shining in the sky”) (11.5-8) や“Lucy Gray”の「人の軒端に咲いた最も美しい花」(“The sweetest thing that ever grew/Beside a human door!”) (11.7-8) という少女の美の比喩にも見られる。「一様性」や「多様性」に対する関心だけでは気がつかない比喩である。確かに Wordsworth は、「様々な区別、差異性」(“manifold distinctions, difference”) (*Pr.* II, 318) や「類似性」(“affinities”) (*Pr.* II, 403) に関心を示している。しかしこれは互いに個体として確立した上での、「統一」(“unity”)の下にある「差異性」であり、異なったもの間の「類似性」である。

次に美の対象に対して生じる「自尊心」に似た感情に

ついて考えてみたい。Wordsworth が美に対して感じる喜びは大きい。しかしその喜びが自分の能力の卓越性の自覚からも生じているというのはあたらぬ。詩人は、美に対して「愛と優しさ」(“the love & gentleness”)が生じると言っているが、それは先にあげた“*She dwelt among the untrodden ways*”や“*Lucy Gray*”に明らかである。美に対する時、愛のみがあり、極端な段階では自我意識は欠如している。極端な、言い換えれば基本的な美の認識の姿は *The Prelude* 第二巻に描かれている、幼少の頃の太陽の認識に見出される。少年は太陽を愛した。それは、「この世の毎日の生活の保障」(“a pledge/And surety of our earthly life”) (ll.105-106) としてではない。太陽の美しい姿 (“His beauty”) (l.109) 自体に魅せられたのである。幾度も茫然と眺め、血液が喜びでかけめぐる幸福感を味わった。また *The Prelude* 第一巻に描かれている湖などで、「永遠の美との無意識の交感」(“unconscious intercourse/With the eternal Beauty”) (ll.589-590) も Wordsworth の根本的な美の認識の姿を示している。

III

An Essay on Taste の第二部は、「単純原理」の結合について述べられている¹³⁾。Gerard によれば、「審美能力」が形成され、十分働くためには、すべての「原理」の結合が必要である。個々の「原理」が働く場合にも、すべての「原理」が生き生きしていなければならない。それぞれの「相互影響」(“reciprocal influence”) が大切である。個々の対象は、「中心的性格」(“leading character”) をもっている。その「性格」によって、ある「中心的感情」(“principal sensation”) をうみ出す。同時に、「従属的性質」(“subordinate quality”) によって「従属的感情」(“attendant feeling”) をうみ出す。その「従属的感情」は、「中心的感情」をより強いものにする。とりわけ「崇高感情」(“sentiment of sublimity”) は「助力」(“foreign aid”) を必要とする。「新奇感」や「美感」の「助力」によって、その感情はより強くされる。また「倫理感」によって効果が高まっている。たとえば Vergilius は、ローマ帝国を築くローマ人を、彼らの強さと共に慈悲心や寛大さを描きこむことによって崇高な人間にしている。

ここで注目すべきは、Gerard は崇高と美を区別しながらも、それらの「相互影響」を重視していることである。そして彼は主観の状態に目を向けていて、主観の状態によって、様々な要素があるにもかかわらず、その一部しか知覚しない場合があると指摘している。

Wordsworth は、崇高と美を区別した。しかし同一対

象が崇高にも美にもなると考え、更に崇高と美は同時に生じないと言っている。一つの対象が、崇高と美の性質を合わせもっていることは確かである。この意味では、Gerard の対象にある「中心的性質」と「従属的性質」という考え方に近いといえる。しかし Wordsworth の崇高と美には区別があり、同時には生じない。崇高と美の区別については、Wordsworth のアルプス旅行の時の Como 湖での体験と Simplon 峠での体験の違いに明瞭に示されている。一方は、幸福と喜びの体験であり、他方は恐怖の体験である。この体験を比較すれば、崇高と美の感情体験が同時であるとはとても思えない。しかしながら、Wordsworth の詩の中には、崇高と美の融合を描いたと思われるような詩がある。その一つとして“*It is a beauteous evening*”があげられる。

It is a beauteous evening, calm and free,
The holy time is quiet as a Nun
Breathless with adoration ; the broad sun
Is sinking down in its tranquility ;
The gentleness of heaven broods o'er the Sea :
Listen! the mighty Being is awake,
And doth with his eternal motion make
A sound like thunder——everlastingly
Dear Child! dear Girl! that walkest with me here,
If thou appear untouched by solemn thought,
Thy nature is not therefore less divine :
Thou liest in Abraham's bosom all the year ;
And worshipp'st at the Temple's inner shrine,
God being with thee when we know it not.

この詩は九行目で前半と後半に分かれる。そしてそれぞれの構成は共通している。即ち、前景と背景の関係である。八行目までの前半に於ける前景は、自然の美と静寂であり、その美と静寂は“Nun”に象徴されるが如く、神聖な、宗教的な面を備えている。背景とは、“Listen!”と詩人が注意を喚起した“the mighty Being”である。その動きは、“A sound like thunder”をたてるほどの激しさをもっている。前景の静寂と背景の動きは著しい対照をなしている。

後半に於ける前景は、“Dear Child”, “dear Girl”である。背景は、“Abraham's bosom”であり、“the Temple's inner shrine”であり、“God”である。この詩に於て前景は美であり、背景が崇高である。そしてこの詩の中心は前景にあり、美にある。この詩を支配している感情は第一に愛と喜びである。崇高に特有の恐怖に類した感情ではない。この詩が崇高をうたったのであるとすれば、

“the mighty Being”や“God”との緊張が必要である。対立が必要である。Wordsworthの崇高の特色は、蛭取りの老人との出会いに於けるように、自我の危機的狀態に於ける強固な自我の確立にある。屈折作用とでもいうものが必要なのである。そのような、せつばつまった自我の再確立作用というものはこの詩にはない。第一に愛であり、喜びである。しかし、背景の崇高なものの作用も否定できない。それならば、この詩を崇高と美の融合と呼ぶべきだろうか。これは、融合というよりも、両方の要素をもちながら、前景、背景という形で各々の要素が働いていると言うべきであろう。そういう意味では、Gerardの「中心的性質」と「従属的性質」の関係という考え方に近いと思われる¹⁴⁾。

IV

第三部で Gerard は、「審美能力」と想像力の関係を扱っている¹⁵⁾。「審美能力」は、感情の一種であると同時に、想像力に依存している。想像力（「内的感覚」）は、「肉体的感覚」（“bodily senses”）または「外的感覚」（“external sense”）と「理性的能力」（“rational faculties”）または「思惟能力」（“reflection”）の中間に位置する。簡単に言えば、感覚と理性の中間に位置するのである。想像力は直覚する。美しい対象のもつ「一様性」、「多様性」、そして「均衡性」を直観し、喜びを直感する。

想像力の特色は、記憶との関係を見るとよく分かる。想像力は、記憶にない観念を表わす。はじめて、たとえば船などの対象を見る場合、感覚のみが働くが、はじめて「黄金の山」を考える場合、想像力のみが働く。二度目に同じ船を見る時、感覚とともに記憶が働く。想像力は、我々が決して知覚したことのない対象の観念を呈示するから、そこには記憶がともなわない。しかし以前に知覚したものやよく知っているものでも、以前に知覚したことを思い起させずに考えられる場合は、記憶でなく想像力によって呈示されている。

記憶は、感覚によって知覚された対象の観念を呈示する。記憶はその対象のもっていた形態や秩序を再現する。しかし想像力による観念の場合はそのようにゆかない。それは記憶による単なる再生ではない。想像力のもつ「結合力」（“associating power”）である空想力（“fancy”）が新しい結合にもたらしたものである。だから、想像力がうみだす観念の多くの結合は、自然に存在するものの再現ではない。しかしこの能力が無秩序に見えても、そこには「一般原理」（“general rules”）がある。その「原理」とは、「類似、矛盾、近接の単純な関係」（“the simple relations of resemblance, contrariety, vicinity”）または「習慣、共存、因果、秩序のより複雑な関係」（“the more

complexities of custom, co-existence, causation, order”）である。このような「原理」の下で最も自然で、瞬間的な「連想作用」は、観念の関係が緊密で、その結合力が強く、一つの観念から別の観念への移行が容易である時に、生じる。想像力は、多くの個々の観念が強く緊密に結合している時、それらを一つの全体にする。このように多くのものに統一を与え、様々なものを一つのイメージに結合するのが「空想力」である。

Wordsworthとの関係で考えなければならないのは、想像力と記憶の関係である。Gerardは、想像力は記憶にない観念を現わすと言う。想像力は、我々が知覚したことのない観念を呈示する。また以前に知覚したものやよく知っているものでも、以前に知覚したことを思い起させずに呈示する。この場合、想像力による観念は記憶による単なる再生ではない。それは想像力の一つの機能である空想力が新しい秩序のもとに呈示したものである。

Wordsworthの場合、彼の想像力の中心的な働きは、記憶を場としている。有名な“I wandered lonely as a cloud”が一つの典型である。そこには、彼の感覚、記憶、想像力の連係作用の一つの典型が述べられている。詩人は、水仙を見つめに見つめる。それが記憶され、回想のうちに、水仙が閃く。彼は喜びを得る。もっともこの場合、彼が注で述べているように十分に想像力が働いたわけではない。十分な発露とは、対象が想像力によって永遠性を帯びることである。単なる「閃き」は空想力の働きである。この点、Gerardの場合とは異なる。Gerardの空想力は、想像力の創造的作用を示すのみである。永遠性などの、いわば宗教性はGerardにはない。

Gerardは基本的に記憶を感覚に結びつけ、想像力と結びつけなかったが、想像力の創造作用についての解釈はWordsworthに近い。Wordsworthの想像力は、「修飾し、創造し、結合する」（“to modify, to create, and to associate”）力である¹⁶⁾。対象に新しい要素を加えたり、そこから要素を除去したりする¹⁷⁾。その作用は記憶の場合にも及ぶ。そして記憶を場とした想像力の働きは、Gerardのいうように単なる過去の再生ではない。しかしWordsworthの場合、それが真実把握の重要な方法なのである。

V

Gerardは崇高と美から得られる喜びとして、「自尊心」をあげていたが、最後にWordsworthの記憶と想像力、そして「自尊心」及び自我意識ということに触れておきたい。

記憶を場とした想像力の働きは真実把握を目的としているが、回想のWordsworthに於ける意味を次のように

も言っている。

So wide appears
The vacancy between me and those days,
Which yet have such self-presence in my mind
That, sometimes, when I think of them, I seem
Two consciousness, conscious of myself
And of some other Being.

詩人は回想によって、自分自身についての意識と、“some other Being”についての意識をもつという。この“Being”が、過去の自分なのか、それとも完全に“other Being”なのか、更にそれは“*It is a beautiful evening*”の“*the mighty Being*”のようなものなのか一概には言えない。ただ言えるのは、Wordsworthには二重の自我意識があるということである。そのような Wordsworth から Gerard の「自尊心」は生じない。二人の自我意識の違いは二人の宗教意識の違いに根ざしているように思われる。Gerard には Wordsworth の宗教性は欠如している。

注

- 1) Alexander Gerard, *An Essay on Taste* (New York : Garland Publishing, 1970).
- 2) *Ibid.*, p.1.
- 3) *Ibid.*, p.2.
- 4) *Ibid.*, pp.11-28.
- 5) *Ibid.*, p.3.
- 6) *The Prose Works of W. Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser (London : Oxford Univ. Press, 1974), II, 455.
- 7) *Ibid.*, p.354.
- 8) Wordsworth の詩の引用は、*Wordsworth Poetical Works* (London : Oxford Univ. Press, 1967)からの引用。
- 9) *Wordsworth The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (1805), ed. E. D. Selincourt (London : Oxford Univ. Press, 1969).
- 10) *Prose Works*, III, 33.
- 11) *The Letters of W. and D. Wordsworth : The Early Years*, ed. E. D. Selincourt, rev. C. L. Shaver (London : Oxford Univ. Press, 1957), II, 367.
- 12) *Essay on Taste*, pp.29-46.
- 13) *Ibid.*, pp.75-84.
- 14) Wordsworth の崇高と美の区別に関して重要なのは、崇高と「知的愛」(intellectual or divine love)の関係である。想像力と「知的愛」は区別できず(*Pr.* XIII, 166-167), 想像力と崇高も区別できない。愛は美から生じる感情であるが、この「知的愛」と崇高との関係の考察は彼の崇高について考える上で欠かせないもののように思われる。
- 15) *Essay on Taste*, pp.148-167.
- 16) *Prose Works*, III, 26.
- 17) *Ibid.*, III, 32.

(受理 昭和57年1月16日)